

講義名	特別講義 (イノベーション・マネジメント)			授業形態	
担当教員	李 東浩	開講期・曜日・時間	後期 金曜日 1 時限		
		単位数	2	履修開始年次	1 年生
				ナンバリング・コード	

## 主題と概要

- 経営学科だけではなく、全大学院のすべての院生も知っておくべき体系知、イノベーション(革新)の基礎知識がなくとも、1から優しく導入・解題・解析して進める。「資本主義の本質はイノベーションである!」、「イノベーションの本質は革新的発案である!」、「発明、イノベーションは普及・模倣」を一体どのように理解すればいいのかな? 受講生の高度な専門知識の蓄積と研究能力の養成に寄与する。
1. 100年以上前にシュンペーター(1911)に提起された「新結合」を特徴としたイノベーションの概念は日本においては「技術革新」(内閣府(1956)『経済白書』)と誤読されて久しい。つい最近、製品開発など生産やモノづくりといったハード面だけでなく、組織・経営・流通・販売など管理や消費、サービスなどソフト面といったソフト面の範囲までも拡大しつつある。つまり、製品イノベーションだけではなく、サービスや経営などのイノベーションもこの分野の射程に収められ、研究教育の膨大な知識が蓄積されている。
2. 他大学では、一橋大学(文科系):日本のイノベーション研究教育の最高峰の代表大学として、かなり組織的に取り組んでいる。学部や大学院だけではなく、イノベーション研究センター、IIPP(Innovation Management Policy Program)など、多くの組織によるイノベーションに関する多層的な研究教育プログラムが数多く設置されている。東京大学(総合系):工学部を中心に、経済学部やイノベーション政策研究センターでも展開されている。他には、神戸大学、東京工業大学、法政大学、東京理科大学、関西大学なども導入されている。本学の学部では、「イノベーション論」の授業もあるが、商品企画・マーケティング・デザインなど実務レベルにとどまっているようである。
3. 2018年度から新規開講された本特別講義では、この分野の知識・能力を持つために必要な課題が選定され、文献レビューとディスカッション・解説を行うことを通じて、受講者が研究を遂行していく

## 到達目標

- (1) 知識・能力を身につける。  
本大学院特別講義は、大学院レベルで体系的・包括的にこの学問分野の知識を学ぶようになる。経営学、組織論、戦略論の俯瞰的な視野を持ち、イノベーションをモノ(製品)とコト(経営・サービス)の両面から捉え、この分野の奥深さと幅広さを勉強できるようにする。古典的な文献と代表的な文献のみならず、最新の文献をも取り入れ、イノベーション分野に関する知っておくべき知識や理論パラダイムを習得し、履修生の高度な研究能力の形成に寄与できるようになる。
- (2) 読書力・文筆力を向上させる。  
履修者はイノベーションの特論課題を毎回事前に課題を熟読したうえ、概要のまとめ・レビュー・問題点と解決案といった3つの内容が入ったレポートに基づき、ローテーションで15分以内で発表する。教員側は60分間の詳細な解説と評価を加えた後、最後の15分間に、全員を考え、判断、質疑・討論、発表、考え直し、まとめ、といった一連の仕組みで授業を進らせる。履修者は毎回知識と能力が身につけることを実感でき、読書力と文筆力の向上に寄与し、論理的な学術研究論文や実証的な企画調査報告等を作成できるようになる。
- (3) 主体的な学習態度を養成する。  
履修生は、能動的に主体的に知識を吸収・理解・習得・運用する能力を養成できるようになる。

## 提出課題

- 期末試験や期末レポートはない。
- 毎回、1頁の読書ノート(レポート)を全員が提出する。ただし輪番報告者は2頁(以上)を提出する。
- 全員、授業開始前までに、授業専用Teamsグループに参加すること(リュウカポータルより連絡有)。
- 全員、毎回、授業専用Teamsグループへ、授業前日(月曜日)17時までに、レポートを提出すること。
- レポートの内容・分量を以下のように作成してください。  
概要のまとめ(半分紙幅)  
レビュー・コメント(1/4紙幅)  
課題・解決案やプラス(1/4紙幅)にする。
- レポートはPDF形式で提出すること。紙のファイル提出は不要。
- 全員、毎回、事前に履修者同士のレポートや資料をも読んでおくこと。

## 課題(レポートや小テスト等)に対するフィードバックの方法

毎回、導入、発表、解説、討論と振り返りを行う。

## 評価の基準

平日の読書ノート(レポート)が100%ウェイトで成績・単位を判定する。具体的に、

- 期末試験や期末レポートはない。
- 毎回出席し、輪番発表や討論参加は必須である。
- 毎回、事前に課題を熟読し、自分のレポートを提出・他人のレポートをも一読したうえ授業に参加する。
- 報告者は報告を、参加者はコメント・質問を、また全員は積極的に授業へ討論・貢献をすること。
- 輪談ではなく通読の形で全員参加が必要がある
- 報告者は、15分以内に、簡潔に報告すること。  
教員は、60分以内に、問題提起・解説・点评・説明・質疑応答をすること。  
参加者は、15分以内に、質問・発言・討論をすること。全員参加型授業を進める。

## 履修にあたっての注意・助言他

- 大量の読書・ノートの時間は必要。最低目安:輪番報告者は毎回6時間、参加者は毎回4時間。
- 古典を運用する。学んだ古典文献を現実社会に積極的に運用・分析してみる。
- 能動的な集団学習。相互の啓蒙、知的な刺激が大事である。
- 教員と履修者は毎回、配布必須資料のほかに、関連、関連文献や情報・課題も教室までに持ち込み、全員発言討論型・参加型授業を行っている。

## 教科書

.使用しない。

## 参考図書

.マネジメント・テキスト イノベーション・マネジメント入門。	一橋大学イノベーション研究センター (編集)	日本経済新聞出版: 第2版 (2017/10/26)	3960	4532134749
.イノベーション・マネジメント 成功を継続させる組織の構築(ウォートン経営戦略シリーズ)	トニー・ダビラ (著)、マーク・J・エプスタイン(著)、ロバート・シエルトン (著)、スカイライ	英治出版 (2007/2/9) 400ページ	2640	4901234986
.イノベーション・マネジメント: プロセス・組織の構造化から考える。	野城 智也 (著)	東京大学出版会 (2016/5/31) 420ページ	5280	4130421433

## その他

- プリントは毎回、采達の資料として事前に配布する。
- 参考文献は、以下の授業計画に書いているように、15回分ある。

## 授業計画

- イントロダクション: 授業の進め方、科目の位置づけ、概要(内閣府(1956)『経済白書』抜粋等導入資料)
- イノベーションの起源と概念(シュンペーター(1911)『経済発展の理論』邦訳版1977 岩波文庫)等)
- 製品イノベーションとプロセス・イノベーション: 生産性のジレンマ=A.Uモデル(アッターバック・アバナシー(1975, 1978, 1998)『イノベーション・ダイナミクス』)
- イノベーションの発生と普及(Ullrich(2000)『イノベーションの発生理論』)
- イノベーションの時代特徴(ブラハラドゥ・クリシュナン(2009)『イノベーションの新時代』)
- イノベーションのジレンマ: 持続的 vs 破壊的イノベーションの論理(クリステンセン(1997, 2003, 2014)『アーキテクチャ・イノベーション』(Henderson & Clark(1980), Ulrich(1995), Baldwin & Clark(2000))
- オープン・イノベーション(チェスブロウ(2004)『オープン・イノベーション』)
- サービス・イノベーション(近藤(2012)『サービス・イノベーションの理論と方法』、チェスブロウ(2012)『オープン・サービス・イノベーション』)
- ユーザー・イノベーション(加藤・高橋・栗木・高橋(2014)『顧客との価値創造 一橋ビジネスレビュー2014春季号』、延岡(2011)『価値づくり経営の論理』)
- デザイン・イノベーション(ベルガンティ(2012)『デザイン・ドリブン・イノベーション』)
- リバーズ・イノベーション(ゴピンダラジャン・トリンブル(2012)『リバーズ・イノベーション』)等)
- ビジネス・モデル・イノベーション(キーンロー・ビツクル(2014)『ビジネス・モデル・イノベーション』)
- デジタル・イノベーション・システム(NIS)(野中・永田(1995)『日本型イノベーション・システム』)
- キヤッチ・アップ・イノベーション: 模倣から創造へ(Kin(1997)Imitation to Innovation: the Dynamics of Korea's technological learning、李東浩(2016)『模倣と創造のダイナミズム』)

注: 一部変更する可能性がある。

## 授業形態(アクティブ・ラーニング)

<input type="radio"/> ア: PBL(課題解決型学習)	<input type="radio"/> イ: 反転授業(知識習得の要素を授業外に済ませ、知識確認等の要素を教室で行う授業形態)
<input type="radio"/> ウ: ディスカッション、ディベート	エ: グループワーク
<input type="radio"/> オ: プレゼンテーション	カ: 実習、フィールドワーク
<input type="checkbox"/> キ: その他(A型であるけども、以上の項目のいずれにも該当しない場合)	

## 準備学修(予習・復習等)の具体的な内容及びそれに必要な時間

- 文科系の大学設置基準等2条2より、2単位の授業は90時間(以上)の学修を必要としている。15回で割ると毎回6時間の学修時間は必要である。
- 毎回、90分の授業時間を2時間とみなされている。毎回、授業外の予習と復習の時間は4時間が必要である。
- 本授業の授業外の学修時間の最低目安:  
輪番報告者は毎回6時間、参加者は毎回4時間。
- 読書・思考・予習復習・討論を学びの習慣に付けてください。日々、大量の読書・ノート・振り返りの時間を用意してください。
- 予習の一例として、初回目の講義では、「イノベーションの理論体系を考え、授業中に各自3分間ほど発表できる」という質問に答えられるように、予習準備をしてください。復習の一例として、今回・前回の講義の内容やキーワードについてしっかり理解して、場合によっては自己調べ、勉強もしましょう。どうしても分からぬ知りたい場合、メールなどで担当先生へ連絡をしてください。

## 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連

- 批判的な思考能力を身につけ、論理的に推論・演绎・帰納するアカデミック素質を養成できる。
- 企業や組織のイノベーションの仕組みを自ら主体的な立場から理解し、身につけた知識・能力等を生かす。
- 組織メンバーと外部関係者とも協力的に働きかけ、論理的かつ実証的に組織のイノベーションの企画と実施行動に参画能力を持つことができる。

## 双方向授業の実施及びICTの活用に関する記述

全員参加型授業である。

## 実務経験の有無及び活用

なし。

## 備考

全員、事前に資料と心構えを準備したうえ、授業に臨んでください。